

「肩凝り」は自立活動の課題になり得るか？

「肩凝り」が自立活動の課題???とはなマークが付いた方もいるかと思いますが、今回は教員サイドに引きつけて自立活動を読み解いていくことにチャレンジしてみたいと思います。

さて、先生(アタ)は肩凝りがありますか?「肩は凝らないかな。」という方、羨ましいです…。かく言う私も肩凝りに悩まされているのですが、肩凝りがあるとただ肩が痛いだけではなく、痛みに意識を引かれて集中はできないし、滑らかな姿勢の転換ができないし、頭痛はするし、眠れないし…と様々な悪循環に巻き込まれます。

で、タイトルの「肩凝り」は自立活動の課題になり得るか?についてを考えてみるのですが、基本に立ち返って「自立活動」という教育課程は何を学ぶものなのかということを確認していきます(詳しくは学習指導要領の自立活動編のP13-17辺りを見てみて下さい)。

自立活動で取り組む学習内容は、6区分27項目や、学習指導要領の記載、ICF、合理的配慮などを鑑みて大別して以下の①-③の内容をもっています。

- ①自分の障害(社会参加に制約が出るくらいの)との上手な付き合い方や自己管理の仕方を学ぶ内容
- ②人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素の獲得に向かう内容(生活の困難)
- ③教科別の指導を下支えする側面(学習の困難)

改めて①~③までを見てみると「肩凝り」は①に該当するかどうか焦点になりそうなことが分かります。例えば、肩凝りによって仕事を休まざるを得ないとか、肩凝りによってパソコンの画面を見ることがままならないとか、課題選定の際に周辺課題に影響を与えうる『中心課題』になっている状態であれば、それは自立活動で取り組む課題になり得ます。

理解を深めるためにもう一例考えてみます。今度は「忘れっぽさ」です。「えーっと、この先生、どこかで見たことあるんだけど、なんて名前だったっけな…思い出せないな…」なんてことはありませんか?特に勤務年数が積み重なり、知り合いの数が増えてきたりなんかするとこういう機会は増してきますが、こういった仕事にあまり支障の無い範囲での「忘れっぽさ」であれば自立活動で取り組む課題には成り得ませんが、それが頻繁に会議日程を忘れてしまうとか、授業で使うはずの物を揃えられず、授業が止まってしまうことが多いなどのいわゆる社会参加不全課題の中心課題として「忘れっぽさ」があるのであれば、自立活動で取り組む課題に成り得ると言えます。

「自立活動」で取り組む課題として何が相応しいのか?を考える際に例えば②であれば安全で安心な摂食の仕方の指導とか、対象物に焦点を合わせて「見ること」「聴くこと」とか、③であれば、教科別の指導で目標に届かない際に、学びを下支えする部分を自立活動で育むとか想像がしやすいですが、①についてはその人自身が生活や社会参加への不全状況に困り感を感じているのかなど、その人の社会との向き合い方によって社会との障壁の感じ方が違うので、ちょっと読み解きが難しいように思います。

また、今回の学習指導要領の全体的な流れの中では自立活動の③の部分(教科の下支え)が強まったような印象を個人的には受けていますが、単に「教科学習での学習不全の補填」として捉えられてしまう危険性もあるように感じています。別号「流れ図…」で解説しますが、チームでの課題の洗い出し、中心課題の同定と指導目標の設定、6区分27項目のフィルターに通すという一連の流れが前提なので注意が必要です。